ASIA WOMEN LEADERS INTERVIEW

Dr. Tian Belawati's Interview (Indonesia)

Q1: 自己紹介をお願いします。

現在、私はインドネシアの公開（Terbuka）大学の教育学部の教授であり、大学教授協会の会長です。また、教育省によって組織されたインドネシアの別の大学の委員会のスーパーバイザーでもあります。現在は、インドネシア公開・遠隔教育協議会（ICDE）の理事も務めています。もちろん、それ以外の仕事も担当しています。

Q2: すべての役割を担っていることについて、どのように感じていますか？

私は若い頃、大人になってから何をしたいのか分からないタイプでした。ただ、流れに身を任せていました。大学にも行きました。学業を終えてからは、学歴に関係するような仕事をしただけです。そして、やるべきことをやって、やっと学長になった。突然なんですよ。仮に、根気よく、情熱を持って、ベストを尽くして仕事をしたとする。その場合、こうした努力があなたをトップ、もしかしたら指導的立場に導いてくれるかもしれません。

私は、国際会議にも積極的に参加し、その結果、シアン協会大学学長、ICDE、放送大学理事などに着任することができました。自分がやったこと、譲ったことがそのまま結果になるんです。同じ分野の人たちとネットワークを作っていたから、こうして人に知られ、好かれるようになったのですね。

普段は、自分のやっていることが好きなんです。好きでないことをやらなければならないときでも、楽しもうとするんです。仕事のスケジュールの中で、同僚とちょっとした楽しみを作ることをいつも心がけています。

Q3: 女性リーダーとして大切にされてきたことは何ですか？

私がインドネシアにいること、そして私が働いている分野にいることにとても感謝しています。なぜなら、この状況では、性別は問題ではないからです。もし人々が男女平等を受け入れていなかったら、それらの組織や大学の学長に私を選ぶことはなかったでしょう。また、インドネシアでは、性別による給与や機会の差はないと思っているので、この状況は幸運であり、感謝しています。

しかし、稀に男性が支配する場面もあります。私が部屋に入ると、秘書と勘違いされ、社長はどこかと聞かれます。でも、私はそういうことを真に受けず、何かのプレッシャーだと思っています。私のことを知らないのだと思い、いつも自己紹介をしています。

男女平等のほかに、私は自分に自信を持つことも大切にしています。女性に優しくない状況に直面しても、私は自信を持って自分をさらけ出し、彼ら、男性ではなく、私たちがリーダーであることを分かってもらうことができるのです。私はいつも物事をポジティブにとらえることができるので、悲観的になることはほとんどありません。何が起こっても、COVIDのときでさえ、私は楽観的です。

Q4: 今、直面している困難は何ですか？

実は今が一番いい時期なんです。堅い責任がない分、時間の自由があります。管理職、特に社長になると、自分の時間をコントロールすることができません。その時間は、他の人たちによって完全にスケジュール化されている。私の勤務時間は、朝の 5 時から夜の 10 時まで。もう 20 年もやっている。それでも、私は講師として働いているだけで、もう管理職の責任はない。自分のやりたいことを選べるというのは、私にとっては贅沢なことです。
社長時代にはなかったことです。

ある方向に行きたいのに、状況がそれを許さないとき、少し落ち込むこともありますが、それも長くはないので、乗り越えられます。

Q5：今、アジア人に必要な教育とは何だと思いますか？

アジアは一つのステレオタイプに一般化することはできないと思います。なぜなら、アジアでは、人材、IT インフラ、デジタルリテラシーの面で、補助金のレベルが違うからです。日本やシンガポール、韓国といった国々は、それぞれニーズが違うかもしれません。しかし、インドネシア、タイ、カンボジア、そして東南アジアの国々は、デジタルリテラシーと創造

性を備えたグローバル市民として、若者を育成する必要があると思います。特にインドネシアでは、若者の創造性を育み、テクノロジー製品の消費者や生産者、あるいはクリエイターとなるよう、多くの努力を傾ける必要があります。私は、インドネシアと同じような発展レベルの国、例えばシンガポールとマレーシアを少し除いた東南アジアの国々と関係があります。

日本とは状況が異なるかもしれませんね。高齢化に直面すると、社会は若い人たちにもっと子供を産ませるように促すかもしれません。だから、女子学生にはアンチ結婚、アンチ家族にならないような教育が必要です。極端なフェミニストと、自立した自信に満ちた女性とは紙一重なんです。教育は重要ですが、国によって優先順位が違うのかもしれません。

でも、デジタルリテラシーにもレベルがあるので、今あるベースラインから、より高いレベルのデジタルリテラシーを実現できるかもしれませんね。例えば、デジタルの世界における倫理的な問題は、私たちが懸念していることです。なぜなら、ネットユーザーの中にはコミュニケーション倫理や文化倫理に欠ける人がいるからです。Twitter や TikTok のコンテンツを見ていると、社会のために建設的でないネチズンがいることがわかります。例えば、TikTok の危険な挑戦は、誰にとっても気になることだと思います。これは、デジタルリテラシーの欠如という弊害の影響でもあります。

Q6：目標を達成するために、各国間でどのような協力ができるのか、ご提案いただけますか？

今、若者に必要なのはインスピレーションだと思うんです。なぜなら、彼らは各国の権威であるテクニック準備から行うと思うからです。しかし、アジア女性リーダーズフォーラムは、女性リーダーに触れ、その経験を共有することで、女性の若者にインスピレーションを与えるキャンペーンを展開することができます。インスピレーションは、彼らにアイデアを与え、自信を持たせ、社会をより良くするためにどのように貢献できるかのビジョンを広げることができます。また、コラボレーションで重要なのは、タイミングと予算です。例えば、オンライン教材やトークショーのライブ配信など、より効果的な教育が可能になります。

Q7: 私たちは、アジアをより良くするために、2030 年までに 1,000 人のプロの女性リーダーが互いに協力し、同盟するオンライン・プラットフォームを立ち上げる予定です。このプラットフォームをどのように発展させるかについて、何かご提案があればお聞かせください。

私たちの多くはすでに多くのフォーラムに参加しているので、これはなかなか難しいことかもしれません。LinkedIn や Facebook など、既存のプラットフォームを利用するのが好まれます。私の提案は、これらのプラットフォームでグループを作ることです。あるいは、自分のウェブサイトを作ることもできますが、この方法についてはよくわかりません。私の経験では、人々が一緒に仕事をするための中立的なプロジェクトがなければ、参加者はあまり増えないでしょう。ですから、ガイドラインとなるようなプロジェクトを用意し、参加者が共通の目標に向かって協力し合うインセンティブを与える必要があります。

< Prof. Ir. Tian Belawati, M.Ed., Ph.D> （ティアン・ベラワティ）教授

ティアン・ベラワティ教授は、生涯を通じてオープンラーニング（ODL）に専門的に貢献してきました。インドネシア国内および海外に住む 40 万人以上の学生を対象とした大規模なオープンユニバーシティ・システムの研究、教育、運営において豊富な経験を有しています。

ニーズや環境が異なる多様な学生を対象とする ODL 教育機関において、様々な職務を経験。1985 年に Universitas Terbuka (UT)に編集者として入社し、学術界のキャリアをスタートさせました。その後、奨学金を得てサイモン・フレーザー大学で教育学修士号を、カナダのブリティッシュ・コロンビア大学で哲学博士号を取得しました。1996 年に帰国後、インドネシア大学インドネシア研究センター長に任命される。センター長として、研究のための資金配分を大幅に増やし、インドネシアの ODL に関する公認学術誌を設立し、大学内の研究文化を促進することができました。彼女の任期中、UT は研究に基づく政策決定を導入し、評判の高い質の高い ODL プロバイダーとしての UT の業績と将来の方向性への道を切り開きました。センターでのリーダーシップの経験は、UT の学務担当副学長として、さらに大きな責任を担うことになりました。副学長として、彼女は ODL を提供するための新しい技術の使用における革新と優れた実践を紹介しました。2001 年から 2009 年までの 2 期にわたり副学長を務めたことで、テンプル大学では、新しく適切なテクノロジーを活用し、発展途上国における新しい ODL プラットフォームを構築することができました。特に、オンラインチュートリアル、オープン教育リソース（OERs)、オンライン試験、デジタルライブラリー、教材開発のための統合情報システム、その他、教育、学習、学術管理における ICT ベースのイニシアチブなど、UT オンラインを通じてイノベーションを導入してきました。

Belawati 教授は現在、UT の学長として 2 期目の任期を務めています。学長としての最初の 2 年間は、ODL の質を向上させ、ODL に対する国民の信頼を高め、国際的および地域の ODL 機関や協会と協力するために、ステークホルダーとのパートナーシップに力を注ぐための決定的な行動をとってきた。また、ODL 研究者として、またトップ・アドミニストレーターとして、他の ODL 関係者や組織との様々な共同イニシアチブに広く携わっています。また、アジア公開大学連合（AAOU）の事務局長（2007-2009 年)、会長（2009-2010 年）にも任命されるなど、その実績は高く評価されています。さらに、選挙委員会メンバー（2007-2009)、執行委員会メンバー（2009-現在)、そして現在は、e ラーニングを含む公開・遠隔・柔軟・オンライン教育の世界的な会員組織である国際公開・遠隔教育協議会（ICDE）の会長として、ユネスコの諮問パートナーとしてそのリーダーシップを世界レベルで認められている。

Belawati 教授は、成人教育の哲学博士号（University of British Columbia, Canada）と遠隔教育管理の教育学修士号（Simon Fraser University, Canada.）を取得しています。彼女の ODL における学術的な評価は、自主研究に対する GTP-Bappenas 賞、世界銀行賞、インドネシア高等教育総局（YAP-DGHE）の若手学術プログラム、国際出版に対する YAP-DGHE 賞、自主研究および共同研究に対する IDRC-パンアジア組織賞、上級自主研究に

対するフルブライト賞といった、様々な賞を通じて認識されてきました。最近の受賞は、教育分野における生涯の貢献に対して、2012 年に AAOU Meritorious Service Award、2014 年 6 月にアフリカ遠隔教育協議会（ACDE）から Distinguished Individual Promoter of the ODL を授与されたことです。

インタビュアー：一般社団法人アジア女性リーダーズフォーラム代表理事　佐々木亜衣/記事制作　Jenny・氏家なを